



世界では、人々やモノ、情報が多文化社会学部が国境を越えてグローバルに行き交っています。

そのなかで仕事をしていくには、どのような職種であれ、コミュニケーションツールとしての英語が必要で、それは相手の言っていることがわかるだけではなく、会話をし、交渉をする、相手の気持ちを受け止めて議論する、そして意見を一致させ、共に行動していくといった高いレベルの語学力です。語学力の養成に力を入れるこの学部が、従来の外国語学部とどう違うのかと疑問をもつ方もいるかもしれませんが、相違点はその先にあります。英語はひとつのツールであり、その英語で何を話し、伝えるのかということに焦点をあて、カリキュラムを構成していることが、この学部の大きな特長です。

グローバルな職場では、どの大学を卒業したかではなく、「この組織でどのような役割を果たすことができるのか」「このフィールドにどのような貢献をなしうるのか」ということが問われます。その意味で大学で身につけた知識とスキルを身に付けることが何よりも重要です。しかし、その知識やスキルが日本語のみに閉じられたものであったとしたら、グローバル化する社会の中で役立つようありません。それゆえに汎用的ツールとしての英語が重要となるのです。世界にはさまざまな文化があり、さまざまな人々が生きています。アメリカ

は確かに極めて大きな影響力を有する国ですが、決してアメリカ的な価値観が全てではありません。アジア、アフリカ、ヨーロッパという多様性を抱えた国々がどのような文化や思想、政治的バランスのうえに成り立っているのかを学ぶことは、グローバル社会に生きる人間にとって不可欠です。この学部にはそれらを教える意欲的な教員が揃いました。私はかつてエジプトのカイロ大学文学部で一年間教鞭をとったことがあります。アラブ・イスラム世界に身を置きながら、日本にいる場合とは異なり、イスラムをはじめとする宗教の意味と社会的役割について深く考えざるをえません。例えばこういったイスラム社会の文化や考え方も、学生のうちにきちんと学んでおけば、どこで働くにせよ必ず役に立つことでしょう。

この学部に入ると、かなりの覚悟をもって英語の勉強をしなければいけません。学生自身がしっかりモチベーションをもって勉強できるよう、私たち教員も学生の英語力を伸ばすためのプログラムを用意し、手厚い指導体制も整えました。

長崎は四〇〇年以上世界とつながってきた歴史を持つ国際交流都市です。この地を拠点にして世界を視野に入れて学ぶことは、きっとみなさんの将来を切り開く大きな力、知の財産となることでしょう。



多文化社会学部
長崎大学
Nagasaki University
School of
Global Humanities
and
Social Sciences

人文社会系 グローバル人材は 長崎大学から 巣立つ



多文化社会学部長就任予定者
佐久間正
長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科教授。博士(文学)。一九四九年生まれ。専門分野は日本思想史。著書に「徳川日本の思想形成と儒教(ベリカン社)」などがある。

数字で見る 多文化社会学部

4コース

この学部の学びのキーワードは「長崎から世界へ」。それを実現するために、グローバル世界の仕組みを学ぶグローバル社会コース、人・モノの動きから世の中をとらえる社会動態コース、異なる文化や言語をもつ他者との共生を考える共生文化コース、そして、オランダを切り口に現代の欧州を学ぶオランダ特別コースの4つのコースを準備しました。それぞれ個性的な先生方がスタンバイしています。自分の学びにぴったり来るコースに進み、目標に向かってチャレンジしてください。

2段構え

語学力を鍛え、その語学力で社会で役に立つ力や知識を身に付ける——この学部の学びの構造は2段構えになっています。これまでの人文系学部や外国語学部にはなかった、グローバル社会で即戦力になる人材を育成するカリキュラムが特徴です。

1000時間

入学してすぐに始まるTransition Programでは、高校での学習から大学での探求へと学びの移行をはかりながら、英語力を集中的に鍛えます。それが「知の1000時間マラソン」。正課科目のほかに、英語宿舎(72時間)、夏期集中講座(63時間)、英語カフェへの参加(189時間)、Program成果発表会(5時間)を含んでおり、正課科目との合計で1004時間の集中学習を実施します。

10:3

Transition Programは指導体制に特徴があります。まず100人の学生を10人ずつ10のグループに分けるのですが、その10人をサポートするのは、教養ゼミナールの担当教員、英語科目もしくは英語で開講される科目の教員、そして学生と教員の間をつなぐコーチングフェローの3人。学生10人に教職員3人がサポートする、国立大学の中でも破格の手厚く丁寧な指導体制です。

30%

多文化社会学部の教員は、約30名。その約30%が外国籍もしくは外国出身の教員で、それぞれ多彩な専門をもち、多言語での講義も可能です。海外での実務経験や調査経験も豊富な“現場に強い”教員団です。